

最終講義抄録



看護学教育とともに

松永保子

信州大学大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程教授

松永保子 教授 略歴

[職 歴]

昭和54年3月 千葉大学教育学部特別教科（看護）教員養成課程卒業
平成6年4月 新潟県立看護短期大学看護学科講師
平成8年3月 教育学修士（信州大学大学院教育学研究科学校教育専攻）
平成9年4月 山形県立保健医療短期大学看護学科助教授
平成12年4月 広島県立保健福祉大学保健福祉学部助教授
平成16年3月 信州大学医学部教授
平成17年2月 保健学博士（広島大学大学院医学系研究科保健学専攻博士課程後期）
平成19年4月 信州大学大学院医学系研究科保健学専攻修士課程教授
平成21年4月 信州大学大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程教授

[所属学会等]

日本看護研究学会，日本看護科学学会，日本応用心理学会，日本看護学教育学会，日本看護診断学会（評議員，平成25～28年），看護総合科学研究会，信州医学会，信州公衆衛生学会，日本看護協会会員，日本看護連盟会員

福山市民病院看護部の研究指導（平成13年度）

福山大学人間文化学部心理学科 非常勤講師（平成18～20年度）

長野県看護協会主催認定看護管理者制度ファーストレベル講師（平成19～25年度）

看護学教育とともに

松 永 保 子

信州大学大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程教授

この度、信州医学会雑誌に寄稿する機会を与えていただき、実に嬉しく思っております。この寄稿文を書くことで、私のこれまで歩んできた道を振り返るよい機会ともなりました。心より感謝を申し上げます。

私の卒業した千葉大学教育学部特別教科（看護）教員養成課程は、その名称が実に長いということがあり、略して「特看」と言っていました。通称「特看」を揶揄して、多くの人から「突貫（特看）工事やってるの?！」というようなことをよく言われました。また、この養成課程は、全国4つの大学の教育学部にしかありませんでしたが、今では全て廃止されています。

私は養護教諭になろうと思い、「特看」に入学したのですが、卒業後、養護教諭にはならず、出版社勤務、臨床経験を経て、教員になりました。最終的に教員になったのは、もともと教育学部出身なので、当然といえば当然でした。

教育者であり哲学者でもあった有名なイマヌエル・カント（Immanuel Kant）は、その著書「教育学」の中で、「人間は教育によってのみ人間となることができる。人間とは、教育が人間から作り出したものにほかならない。」と述べています。確かにそうで、成長過程のそれぞれの段階における適切な教育がいかに重要かは、心理学でよく引き合いに出される有名な「アヴェロンの野生児」や、アマラとカマラと名づけられた「狼に育てられた少女」の話によってもわかります。最も「狼に育てられた少女」の話は作り話であることが、近年になって数人の学者により証明されているとのことですが、「アヴェロンの野生児」については心理学辞典にも載っている真実で、「教育がいかに重要か」ということがよくわかる事例です。

私自身も、長年教育をしてきて、やはり教育は人を人間らしくするためにも、よりよい生活や人生を送るためにも重要かつ必要不可欠なものであると考えます。しかし、最近の世の動向を見るにつけても、教育の内容やその提示方法によっては、人に対する間違っただけの印象や考えを植えつけることにもなってしまう実に危険なものであり、とても難しいものであるとも考えます。

ともかく、これまでのことを振り返ってみたいと思います。

出版社勤務時代

私の卒業した「特看」では、4年生になると病院等における臨地実習以外にも、教育実習がありました。養護教諭1級の免許も取れる教育課程でしたから、養護教諭の実習もありました。それで、ある衛生看護高校に実習に行った時に、看護関係の書籍を出版する会社の編集者の方が、看護学生を対象に出している月刊雑誌に載せている看護技術の撮影に来ていました。その時に初めて、このような仕事があるのだと興味を持ち、すごく惹かれました。その後、養護教諭の採用試験に合格し、養護教諭になる予定でしたが、ある日、新聞で、教育実習に行った衛生看護高校に撮影に来ていた出版社の編集者の募集要項を見つけ、応募したところ採用され、そこで働くことになったのです。

その出版社は、編集者が編集のプロか、臨床経験を積んだかつては看護師という構成の小さな出版社でした。大きな希望を持ち、勇んで入社していましたが、私は編集のプロでもなく、看護師としての臨床経験があるわけでもなかったもので、先輩方に指導されて、また、編集を学ぶ講習会に行き仕事を覚えていったものの、十分に仕事ができているか確信が持てず、とても歯がゆい思いをしていました。特に看護師としての臨床経験がなかったことで、看護について専門的なことになると教科書的なことはわかって、やはり不安がありました。

そうこうしているうちに、2年近くの歳月が流れました。その間、編集に関するいろいろなことを覚えましたが、しかし、看護雑誌の編集をしていても、臨床経験がないだけに、自信や確信が持てないことも多く、これからの人生においても「看護」に係る仕事をしていくのであれば、「やはり臨床が基本で、これから何をするにも、経験が必要だ」と切実に思うようになり、いろいろと考えた末に出版社を退社しました。

ちなみに、今でも時々、書物やテキストを読んでいる、「校正」をしている自分に気がつくことがありま

す。また、出版業界も大変なようで、残念ながら、その出版社はもうありません。

看護師時代

出版社を退社することを決めてから、勤める病院を考えていました。そのような時に、知人から、「あるドクターが開院するので看護師として勤めてほしい」と頼まれました。「私は、臨床経験がないので…」と躊躇すると、「大丈夫、十分に指導するし、お給料も弾むって言っているから」と懇願されて、それならと勤めることにしました。しかし、実際に勤めてから、やはり口約束でしかなかった、と悟りました。

確かに、ある大きな大学医学部附属病院から看護部長が来ましたが、看護部のシステムを整えることなどで忙しそうでしたし、病棟の看護部長も同様で、スタッフの教育まで十分にできる状況ではありませんでした。また、2交代勤務のこの病院は、救急病院も兼ねており、常に救急患者が来るので本当に忙しく、誰に指導らしいことをしてもらおうこともなく、毎日夢中で働いていたように思います。夜勤をしていて、夜が白々明ける頃には、疲れ果てるし、お腹はすくしで、何でこんな仕事をしているのか、とよく思いました。また、この病院では、脳血管障害の動けない患者さんも多く、そのような患者さんには家族やいわゆる雇われた「付き添いさん」が付いていて、人手不足ということもあり、本来看護師がするべきと考えられるケアを家族やその「付き添いさん」が担っていました。ですから、「看護師の仕事とは…」、ということを本当に考えさせられ時期でもありました。

そんなこんなで、いろいろなことを覚えましたが、ここで4年近くの歳月を過ごし、退職しました。

衛生看護高校の教員時代

心身ともに疲れた看護師を辞めてから、しばらくゆっくりしようと思いました。その当時、私は実家で暮らしており、自分で稼いだお金を自由に使えましたから、旅行に行き、アメリカ、ロサンゼルスの人宅でホームステイも経験しました。

アメリカから帰ってきて仕事を探していたところ、千葉県立若葉看護高等学校（現在は千葉県立幕張総合高等学校）の校長先生から電話があり、本学の教員になってほしいと頼まれました。当時、看護師は多くても、教員免許を持っていて看護師免許も持っている大学を卒業した人間が少なく、看護が教えられる教員を

確保することが難しかったようです。ちなみに、私が卒業した「特看」の本来の設置目的は、衛生看護高校の教員を養成することでしたが、卒業して衛生看護高校の教員になるのは、千葉大学においては1学年20名のうち、1名か2名程度でした。この設置目的を達成できないということが全国に4つあった看護教員養成課程が順次廃止された理由と聞いています。

ともかく、衛生看護高校の教員生活がスタートしました。卒業した大学の養成課程の設置目的に合った職に就いたわけです。衛生看護高校を卒業すると、学生は、都道府県知事管轄の資格試験を受けて、合格すれば、准看護師の資格ももらえます。

ここで、15歳から18歳ぐらいまでの高校生に看護学の知識と技術を教育しましたが、実に変なものでした。全ての高校生が自宅から通ってきており、生活におけるほとんど全てのことが親任せです。そのような高校生が、臨地実習で患者さんのケアをすること自体無理がある、と痛感しました。年齢的に両親も若いですから、家族や周りに病気の人や亡くなった人がいることも少なく、いくら言葉で患者さんの気持ちを考えなさい、と言ったところで、やはり難しかったと思っています。物事には何でも「レディネス」が必要なのです。

この時期は、実に複雑な日本の看護師養成システムの中で、衛生看護高校教育を含めた准看護師教育のシステムそのものを何とかするべきなのでは、ということを実感した時期でした。

この頃は、先ず看護系の短期大学に看護学部や学科ができ始め、そのうちに、看護系の学部や学科が大学に新設されるようになった頃でした。

そして、勤務してから6年目に、新潟県上越市に県立看護短期大学を設立するので、来てほしいとお声がかかりました。

短期大学の教員時代

上杉謙信で有名な新潟県上越市は雪深いところでも有名で、新潟県立看護短期大学（現在は大学）の講師として赴任しました。そこで始めて「カンジキ」なるものも履きました。また、消雪パイプも始めて見ました。あの消雪パイプ、確かに道路の雪は解けますが、道路上がグジャグジャになってしまい、それはそれで足を取られるし、夜、氷点下に冷え込むと朝には変な形で凍ってしまうこともあり、歩く時に難儀をしました。

東京の下町で生まれて育った私が、実家から離れて

一人暮らしをするのは、実はこの時が初めてでした。一人暮らしはさぞ寂しかろう、と思っていましたが、赴任後は、とても忙しく、寂しい、というような気持ちになるような時間がなく、教員としての仕事を、ここでも毎日夢中でこなしていたように思います。また、4月の赴任と同時に、これから教員を本業にするには学位が必要と考え、上越市からは新潟市に行くよりも南下して長野市に行くほうが近いこともあり、長野市の信州大学教育学部の修士課程に入学し、修士号を取得することにしました。

もうお亡くなりになりましたが、大学の恩師で内海 混先生という方がおられました。内海先生は、「特考」で教授をされていましたが、皮膚科の医師でもありました。内海先生は定年退職後にも、いくつかの大学から教授としての招聘があったようですが、東京からは離れたくないとお断りになられて、ご自宅の近所にマンションを借りて研究室を始められました。私は大学卒業後も、長年、内海先生が開催されていた英語や統計学等の勉強会に出ており、卒業論文も内海先生に指導して頂き学術雑誌に投稿して業績とするなど、研究を続けていました。しかし、基礎看護技術の講義と演習や実習を中心に教育をしていた新潟県立看護短期大学では、新設の短期大学ということもあったのか、研究をするような雰囲気はあまり感じられなくて、1ヶ月に一度か二度、内海先生主催の勉強会に出席するためや、学会発表や論文作成のための研究指導を受けに、帰京することが楽しみになっていました。

上越で3年が過ぎる頃、山形でも山形県立保健医療短期大学（現在は大学）を創設するというので、助教授（あの頃は助教授）として来てほしいと請われ、行くことにしました。

私にとって2つ目の短期大学も新設でしたから、やはりここでも上越の短期大学と同様に教育システムや諸々のことを整えるのに実に忙しくしていました。

上越にいた時から山形の短期大学でも、友人や同僚とともに看護学生や看護師を対象に研究を行っていました。私は心理学にも興味を持っておりましたので、「看護学生の自己効力感（self-efficacy）に関する研究」「看護学生の成功回避動機に関する研究—その因子構造と基礎看護技術論成績との関連—」などの研究テーマで、学会発表や論文投稿をしていました。あの頃は、今のような教授としての書類づくりや多くの会議などがありませんでしたので、思うように研究ができたと思っています。

また、山形は、さくらんぼ、ラ・フランスなど多くの果物や米沢牛、上越でもそうでしたが、日本海側では刺身や鰯など魚が実に美味しく、今まで赴任したところでは、一番美味しいものが多いと思います。山形での教え子が、いまだに毎年、さくらんぼやラ・フランスを送ってくれます。

ここ山形でも、3年の歳月が流れました。

大学の教員時代

世の中では、相変わらず看護師不足が叫ばれており、平成4年には「看護婦等の人材確保の促進に関する法律」ができました。世の動向は、短期大学から4年制大学の設立にシフトしてきており、国立大学に看護学部や看護学科、看護学専攻など、他に多くの看護系の県立大学や私立大学などができ始めていました。

そのうちに、広島県三原市にある広島県立保健福祉大学（現在は広島県立大学三原キャンパス）から助教授でお声がかかりました。「広島は遠い」と思いましたが、この頃、大学の先輩が広島大学医学部保健学科の教授で赴任することになっており、その博士課程で博士号をとることも考えて移動しました。

4年制大学で教育するようになって、やはり看護師学教育は4年間なくては、と思いました。3年間だと国家試験受験資格のカリキュラムをこなすことに精一杯で、本来大学教育で十分にすべきである「考える」という時間があまりとれない、4年間であれば、昨今、宇宙人みたいな学生が多い中、多少なりとも一般教養や専門科目の教育内容が充実し、よりよい教育ができるのでは、と思いました。

私は、短大に赴任した頃から、心理学的な側面からの研究と同時に、看護学生の技術習得に関する研究に力を入れるようになっていました。研究テーマは、「看護技術教育方法に関する研究—デモンストレーション時の理由づけ学習による説明方法および達成動機が及ぼす効果—」「模擬患者を用いた看護技術教育方法の開発に関する研究」などです。この頃すでに、技術演習時の学生に見せる看護技術のデモンストレーション（通称デモ）を、実際の教員のデモから「ビデオ」あるいは「DVD」の視聴に切り替える教育現場が増えてきていました。しかし、これらの視聴覚教材によるデモは直接学生に話しかけるわけではないし、臨場感もないし、本当に効果的なのかと思っていました。したがって、博士論文では、「デモンストレーション提示方法の違いにおける「無菌操作」技術の習

得に関する経時的変化についての研究—基礎看護技術の効果的教育方法の検討—という長いテーマでしたが、教員による実際のデモとビデオのデモを比較することになりました。教員のデモを見せる群と、教員のデモと同じに見えるように学生が目線と同じ高さで録画したビデオのデモを視聴させる群とに分けて、その後、学生にデモの技術と同様のパフォーマンスをしてもらい、技術の重要なポイントができていのかどうかを3方向から録画し、評価しました。この看護技術に、達成動機、自己効力感、自尊感情の心理学的尺度のデータも加え検討した結果は、ご想像のとおり、やはり教員のデモを見せた群の方が得点がよかったですし、心理学的尺度の得点が高い学生の方がパフォーマンスの結果もよかったです。ですから、人間の代わりに安易に視聴覚教材を使うのは考えものだと思います。

広島では4年間、看護学教育をしましたが、その後、平成16年3月31日に信州大学に教授として赴任しました。通常なら4月1日の赴任ですが、4月1日からは独立法人になるということで、諸々の事が信州大学へスムーズに継続できるように信州大学側が配慮してくれました。信州大学医療技術短期大学部が医学部保健学科になって2年目のことでした。

信州大学に赴任した時には、博士論文の仕上げの真最中でした。その論文指導を受けるために、松本から広島まで何度も往復しました。交通費は高いし、時間もかかり、大学側の配慮もありましたが、仕事との調整も大変で、疲れ果てて、早く書き上げねば、と心底思いました。しかし、きつかったことも含めて、この時のこともよい思い出です。

赴任して3年後には、修士課程ができて、すぐに修士の学生を受け入れ、指導も始め、さらに2年後には、博士後期課程ができ、前にもまして忙しくなりました。長野県看護協会主催の認定看護管理者制度ファーストレベルの講師も頼まれて、講義をするようになりましたから、なおさらです。

国立大学と県立大学では、学生の様子もやはり違いますし、教育システムや設備等にも随分違いがありました。例えば、私は新設の短期大学や大学で勤務していましたので、初めて北校舎4階の実習室に入った時には驚きました。暗い、「木」のリネン棚がある、ベッドは並んでいてもカーテンがないなど、正直なところ、「物置みたい」と思いました。国立大学は、実際に設備費が少ないのですよね。今では耐震構造がなされて、冷暖房完備で、実にきれいになりました。ま

た、教育の根本であるカリキュラムの組み立てがずいぶん違っていました。

ともかく、私の専門は、看護教育学および基礎看護学ですが、本学に赴任してから、講義内容の再考、実習体制や実習要綱の再検討、大学院生の指導など、今に至っても、今までの教育現場で一番忙しい思いをしています。例えば、10年毎くらいに見直されるカリキュラムが、平成20年に改正されることになり、文部科学省に持参する書類を何日も夜なべして作成したこともありました。このように日々とても忙しくても、暇よりは忙しい方がよいのだと自分を奮い立たせ、土曜日や日曜日に仕事をして辛くはなく、実に疲れはしましたが、充実した、楽しい日々であったとも思います。

けれども、やはり体は正直で、公私ともにいろいろなことがあり、仕事のしすぎか、大学への貢献のしすぎか、6年前に病気になり、休職も余儀なくされました。これまでの人生で、父や身内に死なれたことを除き、やはり一番辛くきつかったことです。病気になりたくてなる人はいませんが、体が思うようにならないと、やはり精神的な変調もきたしやすく、落ち込み、これからの人生に希望が見いだせなくなり、そこで家族など周りに助けてくれる人がいればよいのですが、いる人ばかりはいません。また、病気になると、なる前よりも、その人が本当に自分のことを考えていてくれるのかよくわかるようにもなります。

しばらくの間、心身ともに思うようにならず、危ないことも考えたりしましたが、なんとかしなくては、と切実に思うようになり、なんとか復職しました。復職後もすぐには病気になる前のように仕事ができるはずもなく、復調するまで、しばらく時間が掛かりました。復職後の本調子に戻るまでの間にも、人の心情を考えたとは思えない言葉を発せられたこともあり、そのような人には、学生に提示するのと同じ様に、フローレンス・ナイチンゲールの有名な著書、「看護覚え書」の補章「What is a nurse?」の冒頭の言葉を進呈しています。ナイチンゲールは、「教育の仕事はおそらく例外であろうが、この世の中に看護ほど無味乾燥どころかその正反対のもの、すなわち自分自身はけっして感じたことのない他人の感情のただなかへ自己を投入する能力を、これほど必要とする仕事はほかに存在しないのである。そして、もしあなたがこの能力を全然持っていないのであれば、あなたは看護から身を退いたほうがよいであろう。看護師のまさに基本

は、患者が何を感じているかを、患者にたいへんな思いをして言わせることなく、患者の表情に現れるあらゆる変化から読みとることができることなのである。」と述べています。

このナイチンゲールの言葉は、看護職のみならず全ての医療従事者、ひいては人間の基本的な姿勢であると考えます。

看護学教育における定年退職までの32年間において、苦しく心が凍りつくようなことも多々ありましたが、やはり信州大学における教育と研究は実に楽しく、特に大学院生への研究指導や、ともに考え、議論する時間を過ごしたこと（現在進行形です）は、本当に楽しく充実したものでした。

実際にもうしばらく特任教授として講義をさせていただきますし、近年卒業した学部生の卒業研究や大学院修了生の学位論文の学会発表や論文投稿の指導がありますので、しばらくは楽しく生活できる、とも思っています。また、信州大学における持ち時間が残り少なくなっても、嬉しいことに、私のところの博

士・修士課程の受験を希望された方が何人もおりましたが、お断りしなければならなかったことを本当に残念に思います。

いろいろなことがあったここまでの人生を振り返り、このような稚拙な文章で思いつくままに書き連ねました。長くなってしまいましたが、私の気持ちを十分に言い尽くせたわけでもありません。また、研究のことをあまり書きませんでしたので、書き足りない気持ちもあります。

何がなくてもやはり健康が第一です。先生方はじめ皆様方におかれましては、ご健勝であられますように、これからも充実した研究および教育をされますように、また、信州大学のますますの発展を心よりお祈りしております。

先生方、皆様方、ご指導、ご支援をありがとうございました。心よりお礼申し上げます。

これからもどうぞ宜しくお願い申し上げます。